〔書　評〕

鈴木博著

『国語学叢考』

寿岳章子

この，まことに綿密をきわめ，内容も多岐にわたって実に興味に溢れる書は，項目としては二四のはなしで出来ている。題目を見るだけでもおもしろそうなものが多いので，万が一この書を読みそこねる人のためにも敢えて次に掲げよう。

一　四の字嫌い――「四」の音「シ」が「死」に通じることを忌む現象について――
二　祝いの言葉「五百八十年」――「五百八十年七まはり」は千年でなく，四千六十年――
三　「草冠」の意の「サウカウ」
四　かな書き本「太平記」の「ようふう」は「淫風」
五　狂言の言葉「きやうせん」
六　サイカン（才幹）考――「天草版イソップ物語」の飜字――
七　林（りん）四郎のいわれ
八　ライデン本『長恨歌』（和解本）に見る「お（折）れて」について
九　『太平記』巻「落花の雪に」の一節について
十　『三体詩素隠抄』について
十一　「病院」は和製漢語か
十二　ライデンかいま見の記――辞書探訪――
十三　江州すりはり峠
十四　近江八景の歌をめぐって
十五　滋賀大学所蔵の旧教科書の価値――明治中期の関西語と関東語――
十六　国語教材をさかのぼる――サザエノジマン・サルカニ合戦・コロンブスの卵・イソップ物語――
十七　『学びのてほどき』の資料性と言語
十八　黒本植（『黒本本節用集』の旧蔵者）の人物像
十九　『山月記』僻案
〈余録　ミズノエ犬の遠吠え〉
二〇　万葉の姫は燃ゆる思ひ（火）を胸に秘めたか？
二一　雪か布か――『万葉集』東歌窺管――
二二　芥川龍之介への質問――『奉教人の死』をめぐって――
二三　『大成和抄』解説（宗田（そうだ）一（はじめ）氏）
二四　ライデン本『長恨歌』解説

以上のような内容である。これを見て人は著者の，抄物研究者としてのすぐれた能力のみならず，言ってみれば言語的環境を実に豊かならしめる才能について驚かざるを得ないであろう。

たとえば，著者は滋賀大在職の間に，滋賀県という環境に親しい関係を持ち，そういう心境から，十三から十八，すりはり峠という風変りな地名にかかわる話，きわめて人口に膾炙してはいるが，この書にのべてあるようなことはなにも知らない我々に大そう楽しい近江八景論を展開している。

むしろ国語学的な内容でさえも鈴木氏の手にかかるとおもしろくなるのは不思議でさえある。

この目次を見て，何だこれは，と思われそうなのが，〈余録　ミズノエ犬の遠吠え〉であろう。私もとても妙な題だなと思ったが，読んで見て筆者の意図するところが多少わからないでもなかった。ミズノエは鈴木氏の生年，大正11年の呼称である。そして，この一文は，京都府立医大の新入生へのメッセージ文なのだ。内容は，古代の八母音にふれた誰もが知っている音韻史にかかわった事実を使った話である。犬の遠吠えにみずからの言説をたとえたのは，氏の一種のテレでもあろうか。しかし，八母音を唱えた橋本進吉博士の方法論を医学部の新入生に説くのはなかなか愉快なことである。犬の遠吠えどころの話でないけれども，敢えてそういう言いまわしをするところに氏の文章家としての特色がある。

さて，私はまっさきにこの書中での一番短小な文章を取りあげた。それは，いわばこの書の一種の雰囲気を伝えるのに好適かと思ったからであるが，それは氏のよしとするところではないかも知れぬ。で，私もまず正面からこの書に迫ろう。

まず一般に鈴木氏の著書の構成の特色であるが，この本についても，目次のあと，いきなり「四の字嫌い」がはじまる。何となくびっくりしてしまう。いわゆる「はじめに」式のものが何にもないのがいささか奇妙と言えば奇妙に思える。あいさつなしで会議がはじまるようで，おもしろくもある。実用性に富んでいるとも言える。

冒頭の「四の字嫌い」は，シの音を含む語を忌む現象を，アジアでの漢字使用国についての現在の状況報告からはじめて日本でどの時代まで遡れるかをきわめて綿密に調査したものであるが，次には転じて永遠を意味する「五百八十」を論ずる。ここに至って，抄物が出てくる。いかにも鈴木氏らしいとは思うものの，集中的に扱われているというほどではなく，氏の該博な資料知識からおのずと出てきたという感が強い。

ついで，「草冠」の意の「サウカウ」であるが，『孟子抄』中の「艹冠（サウカウ）」という用例について論じている。短い論文ながら，種々の問題にふれてあって面白い。

四の『太平記』の「ようふう」という語が「淫風」の文字にあてられるとの論はびっくりさせられた。「妖風」にあらず，「淫風」だとの想定がきちんとした論証を経つつ推定されていき，さらにその音が「よう」であったろうとの推論である。

五に至って氏は狂言のことばにふれてゆく。狂言「宗論」中の「きやうせん」についてである。私などこの「宗論」をはなから「狂せん」とばっかり思いこんでいたが，他にも色々解釈があることを知った。結論として，「狂ぜ（せ）ん」が正しいのであるが，思いこみでなくなぜそうかを論証してゆくことをしなければならないとあらためて感じた。

狂言の次にはキリシタン物へ。私はこの書における諸論文の並べ方に深い意図を感じる。中世の三大口語資料として，狂言キリシタンとつづいてゆく，それも『天草版イソップ物語』を使っての探究である。「新村出博士が嘗て醜字された「才幹」の字が，「才漢」や「才翰」などをこえて適当である。しかもキリシタン資料には「才漢」も許される場合があるというややこしさ」の話も大いに興味が持てる。本来的には「才幹」でありながら一面多様性を持つ場合もあるというキリシタン物の複雑さはそれはそれとして認識しておきたいものである。

七の「林四郎のいわれ」もとても面白いものだ。「麟」という字に見ないで「林四郎」の三字に読むということがらについての論であるが，あれこれのこの種の現象が念頭に浮かんできて，漢字生活の滑稽な一面を物語られるようで興深い。

八の「折れて」については，室町時代頃から発生した受身を表現する下二段であるのだが，尊敬も可能もあるということが，土井忠生，森田武博士の調査でさまざまの用例を通じて示されている。それについで，『周易抄』『錦繍段抄』『玉塵』等の調査を鈴木氏は示し，さらに補説一・二でもともと下二段に活用する動詞がないというケースなのに，四段形が下二段に活用して受身用法を発生させている実例を教示している。ライデン本の「お（折）れて」からそのことを考えた。

九の『太平記』の『落花の雪』の一節についてでは，音よみか訓よみかについて詳細な論がなされている。「一夜」「旅宿」「古郷」「妻子」「九重」等の語のよみについて考え，さらに訓よみにも又二種ある等々，問題の底辺はますます深まってゆく。「たづ」と「つる」，「ユクへ」か「ユクエ」か，そしてそれらの語の表記等々が不足なく論ぜられている。その他多くのことが次から次へと説かれていて，今ここでは省くが，単なる一節と思いきや，驚くほどの話題があるものよとしみじみ思った。

最終的には「七五調」は，『平家物語』や『宴曲』に於けるよりは，『太平記』の方がその度合が強いとの結論が出た。既に私たちはそれを何となく感じていたように思うが，今ここで証明してもらったのである。

この九で面白いのは，別記一で，嘗つて私たちが習った尋常小学国語読本で，「松阪の一夜」という一文があったが，その文中に「面会の機会は松阪の一夜以後とう〳〵来なかった。」とある，その「一夜」という語が「いちや」か「ひとよ」かについての話である。ソンナモンドッチデモエエガナとはならずに，鈴木氏は子細にさまざまのものを引用して論じている。結局は音よみの「イチヤ」に落着かせている。

この論の中で，鈴木氏は，佐々木信綱博士著『賀茂真淵と本居宣長』についてのべられたが，佐々木博士の名についての註で，(…この自著に「佐佐木」ではなく「佐々木」と墨筆で自署) と加えられた。ふつう，ササキという名は (佐々木) という書き方が想像されるであろう。それなのになぜわざわざ (佐々木) と氏は念を押したのか。どうでもいいことながら，私はこの件について少々思い出があるので記したい。ここの一文の印刷を私が自宅で読んでいた時，私の亡父寿岳文章が，ササキノブツナは「佐佐木」だと言い出したのである。たしかに著書などは「佐佐木」とある。鈴木氏との間にやりとりがあって，その時氏は自署云々の話をした。私はどっちがどうかさっぱりわからなかったが，林大氏の話で事ははっきりした。佐々木信綱は中国相手に書簡を出す時には，中国では踊り字の風習がないので，佐佐木とお書きだったから，佐佐木を公的には時々使われたということらしい。だが，日本ではまず「佐々木」であった。ということで一件落着，鈴木さんが勝ったと言えよう。何でもないことだが，この一件でも，鈴木さんの実際にどう書かれていたか，ということが氏の論拠となったのであって，氏の実証性というものがよくわかる。

さて，少しずつ少しずつ鈴木氏の本陣に近づいてきた。そしてやっと抄物論が出現した。この書中最大のページ数を有する論文である。十番目の『三体詩抄』は，「…素隠の『三体詩抄』古活字版三種について書誌学的にいささか考察しよう…」とはじめにのべられている。しかしこの論は「いささか」どころなく，まことに綿密をきわめていて，書誌学的なものとしては実によく出来ている。

私も『三体詩抄』を一部持っていた。現在は京都大学文学部国語学研究室にさしあげた上に，入手当時多少メモをしておいたものが紛失してしまってさっぱり記憶にないが，とにかく一部持っていた。

古活字版の三種とは，a，元和8年版　b，寛永3年版(寛永3年の刊記が第三冊末にあるもの)　c，寛永3年版異版（寛永3年の刊記が第四冊末にあるもの)，以上の三種である。

最初の元和8年版のものを，鈴木氏は大谷女子大学蔵本で見ている。この本には問題が二つあって，その一つは取合せ本であるということ。その二は，表紙の裏打ちに，数種の古活字版の反故紙が使われているということ。この二つのことは，いろいろ面白い問題を含んでいそうにまず思われる。

どうして取合せ本であるのか。第一冊は何と，元和8年版である。他は寛永3年版である。第二冊以下の見返しには古活字版の断簡が裏打ちに使われ，しかもその裏打ちが，カナ抄や仏書かと思われるものの二種類になり，おまけにそのカナ抄の断簡が全部で八葉あって，それが何と『三体詩素隠抄』と，『荘子抄』とであったというから全くヤメラレナイヤメラレナイという心境になりそうだ。氏はこの断簡について能うかぎりの調査をし，れっきとした結果を得ている。

漸くここで『三体詩素隠抄』そのものに迫るのであるが，氏は問題点を二つ設定した。

第一に，寛永3年版には二種ある。刊記の所在箇所が第三冊末にあるものと第四冊末にあるものとである。この二種は活字の大きさも異なるし，丁数も違っている由である。この差異と，刊記の位置とをからめて考察がなされてる。

第二に，『三体詩素隠抄』の草稿成立の場所が論ぜられている。

『素隠抄』の元和8年古活字版の識語は第八冊末に下のようにあり，しかもそれは寛永3年古活字版(二種とも)にも，寛永14年整版にも，同様に第八冊末に受けつがれている。

于時元和八年壬戌仲夏丙申遡

草于湘南紫陽山下

上の「紫陽山」は三浦市の見桃寺の山号である。つまり，『素隠抄』の草稿の成立は，少くとも第八冊までは元和8年5月1日，湘南の見桃寺においてであると判断される。

ところが寛永14年整版の最終第一三冊末の漢文識語では，伊勢で素隠が書き上げたのを入手し出版したように記されている。神奈川と伊勢と，どうなっているのかについては，鈴木氏は全一三冊のうちの第八冊(までを)書き上げたのが，湘南，その後の五言律詩抄に当たる第九冊から第一三冊までの部分は，伊勢の長島で書かれて完成したという考え方を示された。周到な推理である。

さて『三体詩素隠抄』が所蔵されているのは，鈴木氏がじかに見られた大谷女子大本であるが，ほかには成城大学本(亀井孝氏旧蔵)がある。大谷女子大本と違ってこちらは同様に寛永3年版であるが，全一三冊揃いの完本である。そしてこちらの成城大学本は，各冊ともほとんどすべての前見返し，後見返しが古活字版の反故紙で裏打ちされている。この裏打紙が興味津々であって，いわば「すばらしき裏打紙」なのである。『三体詩抄』，『荘子抄』とはっきりわかる裏打ちが交っているのである。そして，成城大学本と大谷女子大学本との裏打紙には共通箇所がある。その「結果から見ると，両大学本とは，前表紙，後表紙に裏打ちして製本する過程で密接な関係があったかのようである。この両本の製本作業者の手元には，『荘子抄』古活字版の巻九，巻一〇の右記の摺り遺りがあったことになる。このことは単純に考えて，印刷者と製本者とが同一人ならば，古活字版の『荘子抄(少なくとも巻九，巻一〇)』とbの『三体詩抄』との印刷者が，…中略…同一人であろうと速断させる。」

江戸時代，本を作っている人のへやの様子が目に見えるような気がする。

書誌についての考察のあと，国語学的考察に入る。東大本と整版本との比較である。

(ア)下一段活用か下二段活用か

小人ノニワカ大名ニナリテ位ヲ得タルニタトヘルソ(東大本。整版本・タトフルソ)

(イ)オ段長音の開合

人君ノスミタマフ宮中コソ…(東大本。整版本スミタモフ)

(ウ)四つがな

眉頭ヲシワムルハカリシヤトソ(東大本，大谷女子大本シツムルハカリチヤトソ)。

(エ)「サルマヱハ」と「サル上ハ」

…ユキカタシレスニ去テ，…サルマヱハ今ノ世ニ道標ヲシリタラン者ハ，一人モアルマイトソ（東大本整「サル上ハ」）

(オ)「アラマイ」と「アルマイ」

…面目ハアラマイホトニ（大谷女子大本「アルマイ」）

その他，「日波」の読み。「ニワ」か，「ヒナミ」か。「時代」の読み。『「トキヨ」(東大)，「ジダイ」(大谷)』。濁点の有無。ドロドロ(東大)トロトロ(整版)。東大本にふりがな，整版にはなし。「マホル」「マモル」，即ちバ行音とマ行音との交替現象等々の項目についての観察がのべられている。

これらの対応的な現象のいくつかのものから氏は，東大本を，版本に先立つ古写本と見る。しかし事はそう簡単にスラリとゆかないで，必ずしも国語史の流れと合致せぬ逆方向の現象も見られる。こうした現象をどう見るか。

鈴木氏はそれを，「素隠抄成立の頃には，現実に下一段化や四つがな混同等がある程度進んでいて，東大本にはそれが時として露出していると見ればいかがであろうか」と考えられる。「そして版本では出版関係者が当時の京都語での標準的な(クラシックな)語形にできるだけ近づけようとした」という考えを披露された。当を得たものと言えよう。

こうして『三体詩素隠抄』についての書誌学的考察は終った。大きな山をエイサエイサと掛声をかけつつ上って，再びやっと下りてきたという感じがある。この大論文のあと，ホッとする感じで，(「病院」は和製漢語か)がある。山を下りたあと，花咲く野を歩く雰囲気でしんどくなく読める。といっても，「病院」という語についてのみごとな史的考察論であって，気が抜けるというわけではない。とりわけ「病院」という機構的存在が，外国と深い関係があり，しかも日本にもかなり古くから存在し(江戸時代)ていたことの故に，この語についてはそう簡単に論ぜられるわけではない。「病院」という語は日本で作られた漢語であるという説がかなりの人によって唱えられているが，鈴木氏はそれを否定し，『紅毛雑話』にある「病院」の項で，(明人病院と記す)を紹介している。そして『紅毛雑話』はさらに『職方外記』を主要な素材としている。つまりは，ヨーロッパ人が中国で作った漢語であって，和製漢語ではないことを立証した。「療病院」の省略形だという説もあるのだが古い時代からある「療病院」から近代語としての「病院」という語へつながる道筋を見つけるのは至難であろうと氏は説く。

それにしても「病院」ということばをどうして鈴木氏は気にしたのだろう。プライベイトなことだが，氏は病床に臥したり，病院に縁があったりした。その時に，既述したようにみずからの置かれた環境とことばとの関係に敏感であるとの氏の特性が，この論文を書かせたのではなかろうかと私はひそかに考えた。失礼だったかもしれない。さらばお許しあれ。

ライデンかいまみの記——辞書探訪——は氏がライデン大学をたまたま訪れて，二つの稀

書にめぐりあったはなしである。四〇冊の『蘭日辞書』と，キリシタン版の『落葉集』とである。後者は日本でも紹介されて色々の形で私たちも大いに利用しているのであるが，『蘭日辞書』については不明のことがいろいろあって，鈴木氏は大いに気にしつつ，とにもかくにもその現物を見たいとの思い切であった。たまたまその本をライデン大学の図書館で閲覧することが出来た。その喜びを氏は！をうって語っている。この著書中唯一の！である。その喜びはひとごとならず感じられた。実際にその『蘭日辞書』は多くの収獲を与えたのである。

鈴木氏は滋賀大に在職中，「明治大正期を主とする多数の旧教科書の類」を見て，大いに益するところがあったと言う。これらの旧教科書は，単になつかしい古いものというだけのものではなく，教科教育史上有用である上に，国語学的立場からいって，近代日本語の変遷研究上大いに役立つということが昨今わかってきたのである。総数八五〇〇冊もある旧教科書は多くの意味で大そう役立つのだ。国語学的立場でも大へん面白いらしい。明治17年4月刊の『小学修身話法』明治20年3月刊の『修身説話』は談話体が多く見られる。前者は関西語的で，後者は東京語的である。それは，本の中の会話によくあらわれている。東京ニテ，父をチャン，母ヲヲッカアと呼ブガ如キハ，決シテ用ウベカラズなどでも知られる。

明治中期の修身教科書の中には，教材内容の点でまるで国語教科書のようなものがあり，『イソップ物語』などからも多くの話を採って来ていて，なかなかに面白いようである。

『修身説話』の中には，話全体がカ行合拗音と直音，「クヮ」と「カ」の対立に触れたものなどもある。「火事」が「クヮジ」か「カジ」か，でどっちが正しいかを論じているのだが，ちょうど両者共存している時代での具体的状況をふんまえていて，現在ならとうてい考えられない話であり，国語史的にも興味津々である。「クヮ」音から「カ」音へ，小学校教育の上でそう定められたのは明治33年8月の由。しかし実際には，年を取った人たちはずうっと合拗音の発音を残していた。私も，祖父が「クヮシ」（菓子）と言っていたのを記憶している。昭和14，5年頃で，私が女学生の頃であった。

次に鈴木さんは「国語教材をさかのぼる」というテーマで――サザエノジマン・サルカニ合戦・コロンブスの卵・イソップ物語――と話をすすめるが，諸氏の論を引用批判しつつとても面白く教材の物語を展開する。因みに，鈴木氏は「うで卵」を東京地方の方言，「ゆで」の方がオーソドックスであるとされた。その通りであるが，私たち関西人間は「にぬき」というのが専らで，「ゆで卵」も滅多に使わなかったものだ。

あと，『学びのてほどき』の資料性と言語，黒本植（『黒本本節用集』の旧蔵者）の人物像，『山月記』僻案，先述のミズノエ犬，雪か布か，等まことにおもしろい論が続いてゆくが紙数の関係上今はすべて省略する。

最後にライデン本『長恨歌』解説が来る。既に著者とライデン大学との関係はのべら

れているがここできっちりシメをされた感がある。

この稿を閉じるにあたって，ふつうの書評だと大体ほめたあとちょっとばかり「この点が…」式のさらなる要望をつけ加えるようである。だが私にはそれが出来ない。せいぜい「太平記落花の雪に」での知ラズバアルベカラズについて，ズワ・ズンバの関連は—とたずねるくらいが関の山だ。

もう一つ無理に，という感じで言えば，鈴木さんは「差・ちがい」を大へん気にするのだなということである（学者としてはあたりまえのことだが）。二本に差がなければ生まれない論文がある。大ざっぱな私なら決して書けないところである。

(2000.3.2)

(1998年9月30日発行　清文堂出版刊　A5判　290ページ　本体価格7500円)

(2000年3月3日受理)